OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『狭き門』における三角形と四角形 : レシの象徴的解釈
Author(s)	打田, 素之
Citation	Gallia. 1988, 27, p. 21-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7397
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『狭き門』における三角形と四角形

——レシの象徴的解釈——

打　田　素　之

『狭き門』の扉の裏には，「力を盡して狭き門より入れ」という『ルカ伝』（XIII・24）[1]の言葉が記されている。門というと「二本の柱に囲まれた出入口」を連想するが，『狭き門』*La Porte étroite* (1909) における porte は，英語で言う gate よりも，むしろ door を想定した方がよい[2]。作中 porte という単語は何度も現れ，いろいろな部屋の「扉」を表す。中でもアリサの部屋の porte は「狭き門」の門＝扉を象徴している。ジェロームは，第一章の終りで，ヴォーチエ牧師が『マタイ伝』の「狭き門」の部分（VII・13）を引用した時，その扉がアリサの部屋の扉と重なったことを認めている。《cette porte devenait encore la porte même de la chambre d'Alissa》(p. 505)[3]

と言って『狭き門』は，決してジェロームが苦労してアリサの部屋の porte を潜り抜ける物語ではない。彼女の部屋の porte は普通の家の普通の扉なのだから，そこはいとも簡単にジェロームに通過される。そしてそれは開かれてさえいる。本稿で問題としたいことは，ジェロームによる porte 通過の運動自体ではなく，それが作品全体とどのようにかかわっているかである。

彼は自分が書いた物語全八章の中で，三回アリサの部屋へ入る。というよりも入る描写がある。まず第一章において，リュシルの愛人である中尉がビュコラン家へ来ている時，次に第二章で，アリサがジュリエットとジェロームの話を盗み聞きしたエピソードの後で，三回めは第七章で，それまでとは全く変ってしまったアリサと再会した時である。この間，もちろんジェロームは，アリサの部屋に何度も入ったであろうが，作中にその描写はない。

（1）聖書の日本語訳は，全て日本聖書協会発行，文語訳『舊新約聖書』を用いた。引用最後の（　）内の数字は，ローマ数字が章数をアラビア数字が節数を表す。これはフランス語訳聖書の引用の場合も同様。

（2）「狭き門」の実際のモデルとされる porte は，「門」というよりは「戸口」あるいは「扉」である。*Album Gide*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1985, p. 99参照。

（3）『狭き門』の引用は，全て次の版による。André Gide, *Romans, Récits et Soties, œuvres lyriques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1975. 引用最後の（　）内の数字はページ数を表す。引用中のイタリック，下線は全て論者による。

従って，彼の入室はこの三回とする。

これらの例からわかるように，アリサの部屋は非常に偏った現れ方をしている。ジェロームは第一章と第二章で一回ずつ部屋へ入り，その後は全く porte を通過することはない。物語も終りに近い第七章に至って，やっと一回だけアリサの部屋へ入っている。第一章・第二章は，ジェローム，アリサ，ジュリエットの関係を中心に考えた場合，どちらかと言えば静的な章で，物語が動き始めるのは，ジュリエットに二人の求婚者，アベルとテシエールが現れる第三章からである。この展開とジェロームによる porte 通過の関係をみると，通過の偏りは物語の展開と軌を一にしている。ジェロームは，ジュリエットに求婚者が現れ，彼女が彼とアリサから離れて行くと，第七章を除いてアリサの部屋に入ることはない。すなわち，ジェローム－アリサ－ジュリエットの三角の関係が維持されている間は，彼は porte を通過するが，この関係に，アベル，テシエールという外部の要素が加わると，もはやアリサの部屋へは入らない。

七章の入室が問題となるが，次の引用が示す通り，ここに現れるのは昔の痕跡が取り払われた，アリサの部屋ならざるアリサの部屋である。

> Je(Jérôme) m'étonnai, ce matin-là, de ne plus voir au mur, près de son (Alissa) lit, deux grandes photographies de Masaccio que j'avais rapportées d'Italie ; j'allais lui demander ce qu'elles étaient devenues, quand mon regard tomba tout auprès sur l'étagère où elle rangeait ses livres de chevet. Cette petite bibliothèque s'était lentement formée moitié par les livres que je lui avais donnés, moitié par d'autres que nous avions lus ensemble. Je venais de m'apercevoir que ces livres étaient tous enlevés, [...] (pp. 568－569)

従って，物語上真にアリサの部屋が存在したのは第一章，第二章のみで，それ以後『狭き門』からアリサの部屋は消え去ったと言える。

ではこのアリサの部屋は一体何を意味し，その中には何があるのであろう。これを検討するには，通過のテーマの源となっている『マタイ伝』(Ⅶ・13) を見なければならない。まずヴォーチエの引用を引く。

> Efforcez-vous d'entrer par la porte étroite, car la porte large et le chemin spacieux mènent à la perdition, et nombreux sont ceux qui y passent ; mais étroite est la porte et resserrée la voie qui conduisent à la Vie, et il en est peu qui les trouvent. (p. 505)

これはカトリック訳のフランス語聖書とも，ジッドが日頃親しんでいたと言われる Segond

版プロテスタント訳とも異なる[4]。次にそれらを揚げる。

Entrez par la porte étroite ; car large est la porte, et spacieuse la voie qui conduit à la perdition, et il y en a beaucoup qui entrent par elle.

Qu'étroite est la porte et resserrée la voie qui conduit à la vie, et qu'il y en a peu qui la trouvent! (*La Sainte Bible* commentée d'après la Vulgate et les textes originaux par L.-CL. Fillon, tome Ⅶ, Letouzey et Ané, éditeurs, 1901, pp. 56－57)

Entrez par la porte étroite. Car large est la porte, spacieux est le chemin qui mènent à la perdition, et il y en a beaucoup qui entrent par là. Mais étroite est la porte, resserré le chemin qui mènent à la vie, et il y en a peu qui les trouvent. (*La Sainte Bible*, Version Segond, 1959, p. 12)

以上の三例は細部において多くの相違があるが，ここでは特に下線を施した《la vie》という語に注目したい。

引用にある通り，狭き門を通過した人々が見出すものは「生命(いのち)」である。すなわち，ヴォーチエの引用で言えば《la porte étroite》の向こう側にあるものは《la Vie》である。そして『狭き門』の中で，ジェロームがporteを通過して見出すものは，言うまでもなくアリサである。するとどうしてもアリサ(Alissa)と《la Vie》の対応関係を考えたくなる。両者の間にアナグラムを考えることはできないだろうか。カトリック，プロテスタントいずれの訳においても《la vie》のvは小文字であるが[5]，ヴォーチエの引用では大文字である。vは大文字でも小文字でも形に変りはないが，大文字のVは180度回転させると，その形は非常にAlissaのAに近づく。そしてAlissaという綴りにはl，aも含まれており，仮にここでsを排除して，AをVに転換すれば，そこに《la Vie》(生命(いのち))を読み取ることができる。

さて，このようにアリサの名前の中に仕掛が施されているとするなら，ジェロームとジ

（4）Enrico Umberto Bertalot, *André Gide et l'attente de Dieu*, Lettres Modernes Minard, 1967, p. 141.

（5）ジッドは常に複数の聖書を参照しており，特定の作品執筆時の版を限定することは不可能に近い。従って，この場合も《la vie》のvを大文字で記した版の存在を否定することはできない。実際，*La Bible de Jérusalem*, les Editions du Cerf, 1984, p1424, においては，《la Vie》となっている。ただヴォーチエの引用にある《Efforcez-vous d'entrer》は，『ルカ伝』(XIII・24)の表現を付け加えたもので，明らかにジッドの創作である。

ュリエットの名前はどうであろうか[6]。ジェローム (Jérôme) は，その名の綴りにアクサン・テギュとアクサン・シルコンフレックスを含むために[ʒero : m] と発音されるが，これらの記号を無視して綴れば，Jerome となり，さらにrをlに置き換えれば，[ʒəlom] と読むことが可能であり，その綴りは《Je l'homme》となろう。文法的に正しくは《Moi l'homme》だが，「私は人間」という意味を読み取ることができる。またジュリエット (Juliette) もJuを音の近似性から《Je》とみなせば，ジェロームの場合同様「私は liette」と取れよう。liette のみでは，意味のある単語を考えることはできないが，アリサの名から排除されたsをこれに組み入れ，lをジェロームのrと交換すると，アナグラム上は《esprit》という単語に近づく[7]。pの欠落に関しては説明を要するが，彼女の名前は「聖霊」を意味する《Esprit》を内に含み持っている。すなわちこの三人の関係は，単なる三点からなる人物の三角形などではなく，父と子と聖霊ならぬ，「生命(いのち)」と子[8]と聖霊の三位一体を表していると考えられる。当然のことながら，三角形は象徴のレベルでは，神聖で霊的な性質を帯びており，統一を表すとされている[9]。

この三角形の存在は，ジェロームによるアリサの部屋への入室と緊密に結びついている。彼が聖なる部屋，アリサの寝室の戸口を潜り抜ける第一章，第二章においては，三角形は維持されているが，三章以後この関係に別の要素が混入して来ると，人物の三角形は四角形へと変貌し，ジェロームは彼女の部屋へ入らなくなる。四角形が，地水火風，東西南北を持つ物質・自然界を表すことを知るなら[10]，彼が三章以後アリサの部屋へ入らないこと，つまり俗の世界にとどまることが明瞭に理解される。

（6）ジェロームとアリサの名前に関しては，すでに実証的なレベルでの解明が行なわれている。Keith Cameron, 《Gide, Jérôme, et saint Jérôme》, in *Bulletin des amis d'André Gide*, N° 39, le centre d'études gidiennes de l'université de Lyon II, 1978, pp. 58－65.

（7）ここで想定されているアナグラムの混交は，次の三位一体の議論と密接に結びついている。三位一体とは，三者が一つとなって唯一者を表すわけだから，アリサの文字はジュリエットの文字であり，ジュリエットの文字はジェロームの文字であるわけである。

（8）ジェローム＝キリスト論に関しては，福音書とレシの構造を論じた拙論『マルスリーヌになぜ兄が二人いたのか』「待兼山論叢」《文学篇》第21号，1987. 参照。

（9）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館，1987, 《triangle》の項。ジュリエットの名前に欠けているpは，「希望と成功，しかしその後に破滅 ruin が続く」ことを象徴する（《p》の項)。それ故，彼女が結婚後，幸せな生活を送ることから，アナグラム上必要とされるpが排除されているのではないだろうか。

（10）同上書《square》の項。

また『狭き門』における四角形の存在は，アリサ，ジェローム，ジュリエットと他の人物との関係に見られるだけでなく，物語の舞台となるフォングーズマール自体にも見て取ることができる。フォングーズマールは深く四角形に支配された場所なのである。それは作品冒頭にあるビュコラン家の描写によく示されている。

> Elle (la maison) ouvre une vingtaine de grandes fenêtres sur le devant du jardin, au levant ; autant par-derrière ; elle n'en a pas sur les côtés. Les fenêtres sont à petits *carreaux* [...].
>
> Le jardin, *rectangulaire*, est entouré de murs. Il forme devant la maison une pelouse assez large, ombragée, dont une allée de sable et de gravier fait le tour. (pp. 495－496)

庭に面した窓はおよそ20あり，そこには vitre ではなく carreau がはめられており，家の前にある庭は長方形をしていて，その回りを小径がめぐっている。

『イメージ・シンボル事典』によれば，四角形は，まず「堅固・安定」あるいは「複合的な秩序，組織，構造を表す」とあるが，次の項目には，「キリスト教においては死すべき運命を表す」という記述が見られる[10]。フォングーズマールを支配する四角形は，後者の意味を象徴していると言える。それは地上の安定を表すどころか，死を暗示するイメージなのである。その証拠にここで暮した人物達は，早くにここを離れた者を除いて，死という運命をたどっている。それはアリサとその父親である。他の人物達，たとえば彼女の母親は愛人と逃げることによって，最初に姿を消すし，ジュリエットはニームのぶどう園主と結婚し，南仏に居を移している。アリサの死後，フォングーズマールは弟のロベールの所有となるが，彼は早々にここを売払って，ジュリエットの下へ行く。このように最後までこの土地にとどまって，生きのびた人物はいない。まさに Fonguesemare (菌生の沼) と名付けられた所以である[11]。

そして四角形が帯びる死のイメージは単に物語の舞台を支配するだけでなく，人物関係の四角形をも支配している。第三章で，初めてジュリエットの求婚者，テシエールのことが言及されるが，まずジェローム－アリサ－ジュリエットの聖なる三角形を破壊し，四角形へと変化させるのは，ジェロームの友人アベルである。結論を先取りして言えば，『狭き門』における四角形は死の様相を帯びているため，人物関係の一角は常に死によって消滅すると言える。従って，アリサは最後に自ら死を選ぶことになるのだが，彼女の死はジェロームとジュリエット，そしてテシエールの三人との四角形が形成されてからのことであ

---

(11) Eiko Nakamura, 《Les deux jardins de *la Porte étroite*》in *Bulletin des amis d'André Gide*, N° 53, 1982, pp. 29－37.

る。では，テシエールの先代ともいうべきアベルは，いかにして死ぬのであろうか。

アベルは第三章でジュリエットに恋し，第四章で彼女に結婚を申し込む。しかし彼女がジェロームを愛していることを知り，傷心の思いでイギリスへ発つ。その後の彼については，作中あまり触れられないが，少なくとも彼が死んだということも伝えられていない。彼の四角形からの排除は何を意味するのか。彼の消失は死と解釈してよいのであろうか。この問いには，彼の名前が答えてくれる。すなわち『創生記』の挿話「カインとアベル」のアベルである。ここで注目したいことは，アベル殺しの過程ではなく，エデンの園を追われたカインの運命である。神から「汝は地に吟行ふ流離子となるべし」(Ⅳ・12)[12]と言われたカインは，エデンの園を追放され東のノドという土地に住むことになる(Ⅳ・16)[13]。ノドとはもちろん「さまよう」という意味である。この物語を『狭き門』にあてはめると，殺意の有無に相違はあるが，カインにあたる者はジェロームであろう[14]。彼はアベルがイギリスへ去った後，アリサにフォングーズマールへ来ることを拒否され，エコール・ノルマルを卒業してもそこへ戻ることはない。そしてこの頃から放浪と言ってよい生活が始まる。彼はオルヴェト，ペルージア，アッシジと言ったイタリアの町を転々とする。最後に彼が兵役で送られる先は，パリよりもさらに東にあるナンシー(Nancy)という都市である。兵役期間中，一度だけジェロームはアリサと会う約束をするが，この時もアリサがパリへ来ることになっている(p. 551)。死のイメージに満ちたフォングーズマールをエデンの園と呼ぶことはできないが，アベルの恋敵となることによって，間接的に彼の殺人者となったジェロームは，まるで神から罰を下されたカインのように，放浪の身となり，フォングーズマールの東，ノドならぬナンシーに送られ，そこにとどまることを余儀なくされる。

以上のようにして，アベルは人物関係の四角形から姿を消す。次に彼に代わって四角形の一角を占めるのは，ジュリエットの夫となるテシエールである。彼はアベルが失恋してフォングーズマールを去ると同時に，ジュリエットの正式の婚約者となる。このテシエー

---

(12) Segond 版仏訳を揚げておく。《Tu seras errant et vagabond sur la terre.》(Ⅳ・12)

(13) 《Caïn s'éloigna de la face de l'Eternel, et habita dans la terre de Nod, à l'orient d'Eden.》(Ⅳ・16)

(14) 周知のごとく新約聖書の多くの物語は，旧約聖書の物語のパターンをそのまま，あるいは変形した形で踏襲している。カイン＝キリストとする議論(D・アラン・エイコック「カインの徴」『聖書の構造分析』紀伊國屋書店，1984，pp. 231－242)もあり，レシの主人公が構造上，福音書のキリストの位置にあるとするなら(拙論『マルスリーヌ…』参照)，若干の留保は必要とされるが，ジェロームとカインを等号で結ぶことも可能である。

ル－ジュリエット－アリサ－ジェロームの四角形は，しばらく維持される。しかし第八章に至って，アリサがフォングーズマールを去リ，パリの療養所で死ぬと，再びその一角が欠落する。ここで，残されたテシエール，ジュリエット，ジェロームが新たな三角形を形成するかというと，そういうことはない。テシエールはもともと存在が薄く，アリサが自分が原因でジュリエットを彼と結婚させることになったと考えていたからこそ，彼女に罪の意識を自覚させる存在として，四角形の一角を担うことができたのである。またジェロームの彼に対する認識は非常に薄く，ジュリエットの結婚後は，全く問題にしてないと言ってよい。従って，彼のことを意識するアリサが死んでしまった以上，彼の存在もこの四角形から，同時に消え去ってしまったと考えられる。では『狭き門』は，ジェロームとジュリエットの二極が残ったところで幕を閉じるのであろうか。そう考えるには，第八章の次の部分はあまりにも暗示的である。

> Je (Jérôme) ne pus voir qui sortait du jardin ; mais j'entendis, je sentis que c'était Alissa. Elle fit *trois* pas en avant, appela faiblement :
>
> "Est-ce toi, Jérôme?..."
>
> [...]
>
> "Pourquoi te cachais-tu? me dit-elle, aussi si simplement que si ces *trois* ans de séparation n'eussent duré que quelques jours.
>
> [...]
>
> "Allons jusqu'au banc, reprit-elle. — Oui, je savais que je devais encore une fois te revoir. Depuis *trois* jours, je reviens ici chaque soir et je t'appelle comme j'ai fait ce soir... (p. 575)

ここでは，プレイアッド版約半ページの間に，trois と言う単語が三度繰り返されている。すなわち，「三日前」からジェロームを待っていたアリサは，「三歩」彼の方へ進み，「三年間」の別離が，まるで二，三日であったかのように，彼に話しかけるのである。この時点で，アリサはまだ生きているわけだから，もちろん人物の四角形は維持されているが，頻出する trois は，すでにアリサ死して後の新たなる「聖」三角形の復活を暗示している。新たな三位一体は，『アリサの日記』の後に置かれたエピローグに現われる。

アリサの死後十年以上が経過して，ジェロームはニームのジュリエットの家を訪ねる。この時，彼は彼女の娘の代父となることを頼まれる。子供はアリサと名付けられており，ここに第二のアリサが登場することによって，再びジェローム－アリサ－ジュリエットの三角形が蘇る。そしてアリサの部屋は，彼女の死後ニームに移され，フォングーズマール売却後もジュリエットの家に存続している。

Le soir montait comme une marée grise, atteignant, noyant chaque objet qui, dans cette ombre, semblait revivre et raconter à mi-voix son passé. Je (Jérôme) revoyais la chambre d'Alissa, dont Juliette avait réuni là tous les meubles. (pp. 597－598)

第二章以後アリサの部屋へ入ることがなかったジェロームは，再び聖なる三角形の復活が予告された時，まさに十数年ぶりにその聖なる porte を通過している。最後の一文《Une servante entra, qui apportait la lampe.》(p. 598) に使われている《servante》という単語が，エピローグの初めでは単なる「女中」を表す《bonne》であったのに対し，ここでは「神に仕えし女」の意味を持つ《servante》となっていることも，この部屋に神聖さを付け加えている。

さらにエピローグが全体の中で占める位置を考えると，ジェロームによる章が八つあり，『アリサの日記』を一章と数えることができるので，エピローグに章数は振られていないが，この部分は第十番めの章ということになる。10 (ten) という数は，再度『イメージ・シンボル事典』によれば，「9 以下のさまざまな数の分裂のあとで再び統一へ回帰することを表す」ということだから，量的な問題はあるとは言え，エピローグは作品全体に統一を与える章にあたると言えよう。そして実際そうなっている。

このように『狭き門』は，作中に現れる図形的なシンボルを中心に考えた場合，聖なる三角形が，死を意味する四角形へと変貌し，再びもとの形を回復しようとする運動に貫かれた作品だと言うことができる。